

NEWSLETTER No.56 TŌYŌ ONGAKU GAKKAI KAIHŌ ISSN1340-5578
Sep.10,2002

THE SOCIETY FOR RESEARCH IN ASIATIC MUSIC

社団法人 東洋音楽学会 **会報** 第56号

発行(社)東洋音楽学会〔事務所〕〒110-0001 東京都台東区谷中5-9-25 第2八光ハウス201号

TEL.03-3823-5173 FAX.03-3823-5174 E-mail LEN03210@nifty.ne.jp

ホームページ <http://www.soc.nii.ac.jp/tog/>

目次

第33回通常総会のお知らせ	1	定例研究会発表募集	3
第53回大会のご案内	1	定例研究会報告	3
会費納入のお願い	2	会員異動	9
片岡義道先生を偲んで	2	図書・資料等の受贈	10
『東洋音楽研究』原稿募集のお知らせ	2	新刊書籍	11
沖縄支部十周年記念誌販売のお知らせ	2	新発売視聴覚資料	12
第5回中日音楽比較研究国際シンポジウムについて	3	前号の訂正とお詫び	13
定例研究会開催予定	3	編集後記	13

第33回通常総会のお知らせ

第33回通常総会招集状

2002年7月20日

社団法人 東洋音楽学会会員各位

社団法人 東洋音楽学会
会長 柘植 元一

社団法人 東洋音楽学会定款第23条及び第26条の定めに基づき、第33回通常総会を下記の通り開催いたしますので、正会員はご出席ください。

記

日時 2002(平成14)年10月13日(日)13時~14時30分

場所 東京藝術大学音楽学部5-109教室

審議事項

第一号議案 役員改選の件

第二号議案 2001年度事業報告の件

第三号議案 2001年度収支決算の件

第四号議案 2002年8月31日現在貸借対照表・財産目録の件

第五号議案 2002年8月31日現在会員異動状況の件

第六号議案 2002年度事業計画の件

第七号議案 2002年度収支予算の件

第八号議案 その他

・同封の返信はがきにより、出欠を9月20日(金)までにお知らせください。

・総会欠席の方は、委任状欄に必ずご署名、ご捺印の上ご投函ください。捺印のないものは無効となりますのでご注意ください。

・上記以外の議案を提出なさりたい方は、あらかじめご連絡ください。

第53回大会のご案内

(社)東洋音楽学会第53回大会を、同封のプログラムのとおり開催いたします。どうぞ多数ご参加ください。

出欠の回答

出欠の如何にかかわらず、同封の返信はがきの各欄に漏れなくご記入の上、9月20日(金)必着でご返送ください。なお、総会欠席の方は、必ず委任状欄にご記入ご捺印ください。

大会参加費・懇親会費・昼食代の納入

大会受付の混乱を避けるため、同封の振替用紙にて、9月30日(月)までにご送金ください。やむをえず間際にご送金なされた方は、「払込受領書」を受付に提示願います。なお、払込の金額は下記のとおりです。

大会参加費 3,000円 (学生会員2,000円)

懇親会費 4,000 円 (学生会員 3,000 円)

2 日目昼食代 700 円

(* 会場周辺には飲食店がほとんどありませんので、ご予約をおすすめします。)

プログラム

当日会場ではプログラムの再配付はいたしません。同封の冊子を忘れずにご持参ください。

会費納入のお願い

9 月 1 日より本学会の 2002 年度 (2002 年 9 月 1 日 ~ 2003 年 8 月 31 日) に入りました。新年度会費の納入をお願いいたします。

会費請求書と振替用紙を同封いたしましたので、未納金額をお確かめのうえ、早速払い込みください。振替用紙の住所・氏名欄には記載漏れのなきようご注意ください。会費滞納がありますと、機関誌をお送りできません。

なお、本紙と行き違いに納入がありました場合には、どうぞご容赦ください。

片岡義道先生を偲んで

東洋音楽学会顧問片岡義道先生が、去る 2002 年 6 月 16 日御逝去になりました。84 年の御生涯でした。先生は滋賀県大津市のお生まれで、1942 年京都帝国大学文学部哲学科を御卒業、1954 年にはドイツのキール大学哲学科音楽学科に留学され、1956 年同大学で Doktor der Philosophie を取得されました。留学前より奉職されていた京都市立芸術大学においては、1979 年音楽学部学部長に就任され、それは御退官迄及びました。東洋音楽学会では 1954 年理事に御就任、1977 年度より 1989 年度まで関西支部長、更に 1982 年度より 1983 年度までは副会長を勤められました。この間 1959 年関西支部の再建に際しては、故林兼三、張源祥、仲芳樹、平野健次等の諸師と共に参画され、今日の関西支部の繁栄の基礎を築かれました。

又片岡先生は、大津市坂本の西教寺に本山を置く天台真盛宗の末寺西徳寺の御住職でもあり、若くして天台宗大原流声明の嫡流者であった故多紀道忍師のもとで声明の修業に励まれ、そのお名前は大原流声明の嫡流譜にもとどめられているところであり、更に故吉田恒三師等と共に天台声明の研究にも没頭され、その研究に関する著述、論文は、宗教哲学、美学等に関する論文と共に枚挙にいとまがありません。1964 年に自らが演唱、解説をされたレコード「天台声明」(日本

リドル、第 19 回芸術祭文部大臣賞受賞) は、当時の我々学究の徒に多くの学問的示唆を与えられました。又、1965 年ベルリン芸術祭よりの招聘に始まる数度の渡欧では、講義、講演、演唱等を通じて欧州への声明の紹介と普及に尽力されました。

晩年は天台真盛宗法儀研修所の所長として後進の育成に努められる傍ら、鎌倉時代、声明と雅楽の理論的融合をはかった蓮入房湛智の所論に基づいての声明演唱古態の研究と復原に意を傾けられ、その成果を国立劇場を初め全国諸方で発表されました。

先生在りし日、声明を語られる先生の温容の眼の中に、少年のように澄んだしかも熱っぽい瞳の輝きを感じたことを今更に感慨深く思い出します。願わくば御浄土より我々後進に御照覧給わらんことを

東洋音楽学会参与 相愛大学音楽学部教授
小野 功龍

『東洋音楽研究』原稿募集のお知らせ

学会機関誌『東洋音楽研究』第 68 号 (2003 年 8 月刊行予定) の原稿を募集しています。

原稿の種類、執筆要領等については、今年発行した第 67 号の巻末に掲載した「投稿規定」をご覧ください。また書式の詳細については、「投稿の手引き」を学会ホームページでご参照ください。ホームページをご覧になれない場合は、氏名、住所を明記のうえ編集委員会までご請求ください。

なお、学会の年度が改まり、役員改選に伴ない編集委員会の構成が変わるため、原稿の送付先も変わります。締め切りは、例年に倣えば 12 月 20 日前後ですが、これも新委員会が決定するまで確定できません。原稿の締め切り、送付先ともに、10 月に予定される大会 (総会) 以降に、学会事務局までお問い合わせください。 (機関誌編集委員会)

沖縄支部十周年記念誌販売のお知らせ

昨年 11 月に沖縄支部十周年の記念誌として刊行した『東洋音楽学会沖縄地区通信・沖縄支部通信集』に残部があります。ご購入希望の方は、通信集代金 1,000 円と送料 310 円の合計 1,310 円を下記の口座に振り込んでください。

振込先：郵便振替口座番号 01740-1-7318

口座名称：東洋音楽学会第 52 回大会実行委員会

第5回中日音楽比較研究国際シンポジウムについて

上記の集会在2003年11月下旬に上海音楽学院で開催されます。テーマは、音楽学、作曲理論、音楽教育で、準備委員会では、現在、正式参加者(発表者)を募集しています。参加を希望する会員は、2002年10月31日までに下記宛にレジュメ(日本語、中国語、英語)を送付してください。なお、詳細を知りたい場合は、学会事務局までお申し出ください。
musart@online.sh.cn

定例研究会開催予定

本部

第450回定例研究会

2002年11月9日(土) 午後2時-4時30分

東京藝術大学音楽学部

内容未定

第451回定例研究会

(第71回日本音楽学会関東支部・東洋音楽学会合同例会)

2002年12月14日(土) 午後2時-5時

成城大学

内容未定

第452回定例研究会

2003年2月1日(土) 午後2時-4時30分

上野学園日本音楽資料室

内容未定

関西支部

第210回定例研究会(日本音楽学会関西支部例会と合同)

2002年9月21日(土) 午後1時より

大阪音楽大学K号館

(阪急宝塚線庄内駅より徒歩8分の本校より)

スクールバスあり)

第一部 修士論文発表会

「ケージとフルクサス - パフォーマンスの問題を中心に」

上坂未央

第二部 パネル

「復元」の試みにおける研究者と実演家の役割

コーディネーター・司会: 寺内直子(神戸大学)

パネリスト:

「西洋古楽における「復元」 - モンテヴェルディの演奏をめぐって」
津上智実(神戸女学院大学)

「雅楽の「復元」について」

広瀬信夫(大阪芸術大学)

「能の「復曲」 - 菅丞相を例に」

北見真智子(神戸大学)

定例研究会発表募集

本部

下記の定例研究会における研究発表(口頭)を募集します。発表希望者は、発表種別(研究発表、報告等)発表題目、要旨(800字以内)発表希望日、氏名、所属機関、職名、連絡先(住所、電話、Fax、E-mail等)を明記の上、学会事務局宛お申し込み下さい。

第450回定例研究会

2002年11月9日(土) 午後2時-4時30分

東京藝術大学音楽学部

第452回定例研究会

2003年2月1日(土) 午後2時-4時30分

上野学園日本音楽資料室

関西支部

関西支部では、定例研究会での会員相互の活発な活動を期待しています。研究発表等は下記の宛先にお申し込みください。その際、発表の種別(研究発表、資料紹介、研究演奏、調査報告など)、題目、使用機器、発表希望月、所属、氏名、連絡先を明記してください。

関西支部定例研究会発表申し込み先

〒656-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1

国立民族学博物館

寺田吉孝(例会・広報担当理事) 研究室気付

email: terada@idc.minpaku.ac.jp

定例研究会報告

446回東洋音楽学会定例研究会(2002年4月6日)

東京藝術大学音楽学部 5-301教室

.2001年度卒業論文発表(その2)

1.20世紀前半の中国におけるプロバガンダ歌曲

新居洋子(国立音楽大学)

(発表要旨)

他の国々と同様、中国にとっても20世紀前半とは激動の時代だった。長らく中国を支配してきた清朝の崩壊、社会のあらゆる面で続々と中国国内へ侵入する欧米・日本の勢力…。こうした混乱の中で思想家・学者など中国の「知識人」たちは、「旧社会」つまり従来の中国社会にかわる「新しい中国社会」の実現を強く求め、「プロバガンダ芸術」の創作及び研究に向かっていった。そしてこうした芸術の中でも、「歌曲」はとりわけ大きな注目を集めていたのである。

牧陽一他『中国のプロバガンダ芸術』の「序」には、次のような印象深い一節がある。「〔20世紀の中国において〕人民はプロバガンダに『洗脳された』というより積極的に受けとっていったと言った方がいい。」

本研究における出発点となっているのは、上の引用文に示された「受容する側」の「主体性」である。そしてこれを解き明かすため、実際にどういった人々がプロバガンダ歌曲に関わっていたのか、そしてどんな歌曲が創作されたのかといったことを、本発表では1930年代前半における状況を中心に探っている。20世紀初めから盛んになった「学堂楽歌」運動を始めとして、1920年代までのプロバガンダ歌曲活動では、常に知識人あるいは共産党員や国民党員がその中心にいた。1930年代初めには、政局の転換をきっかけとしてある種「自由主義的」な空気が広まる。こうした環境の中で、「共産党」「知識人」そして「一般大衆」という3者がそれぞれ少なからぬ「主体性」を持ち、同時に強く影響しあいながらプロバガンダ歌曲活動に取り組む、という状況が生まれたのである。その後の1940年代には、革命戦争の激化にともない、知識人は共産党と直接結びついたプロバガンダ活動を行うようになる。従ってある見方をすれば、1930年代前半は「最もバランスのとれた活動が行われた時期」といえるのかもしれない。

2.バリ島のガムランにおける拍とリズムの考察 - グンデル・ワヤンの曲を事例に

與那城常和子(沖縄県立芸術大学)

(発表要旨)

本研究は、インドネシア・バリ島のガムラン gamelan 編成の一つであるグンデル・ワヤン gender wayang の曲を事例として取りあげ、その拍とリズムについての分析と考察、また現地調査における言説を通して、バリ人がもつ拍とリズムの概念を明らかにすることを目的とする。

バリの演奏者によると、何十曲もあるグンデル・ワヤンの曲は、「有拍」と「無拍」の2つのカテゴリーに分類される。しかしながら、グンデル・ワヤンの曲において拍を感じる曲

に対して「マツ・ゲンチャン mat gancang」すなわち「速い拍」、拍を感じない曲に対して「マツ・アデン mat adeng」すなわち「遅い拍」という意味の言葉を用いている。つまり、拍がある、拍がないという感じ方をするにも関わらず、民俗用語においては「速い拍」、「遅い拍」という意味の言葉を用いているという点で双方にズレが生じている。

本論における分析および考察の結果、「マツ・ゲンチャン」と「マツ・アデン」には、理論的に2つの異なる拍の概念が存在することが考えられる。一つは、「マツ・ゲンチャン」における規則的な等音価の拍であり、もう一つは、「マツ・アデン」におけるフレーズの単位を一拍と考えた不等音価の拍である。言い換えれば、彼らは、拍を感じない曲と拍を感じる曲に対して双方に異なる拍の観念を感じているのである。ゆえに、拍を感じない曲に対しても「マツ・アデン」つまり、「遅い拍」という言葉を用いていると考える。以上を踏まえて、本論では、等音価の拍をもつテンポの速い曲を拍のある曲、つまり、「マツ・ゲンチャン」、フレーズを単位とした不等音価の拍をもつテンポの遅い曲を拍のない曲、つまり、「マツ・アデン」と定義した。

.2001年度修士論文発表(その2)

1.オルティン・ドーの楽曲の民俗分類法とヴァリエーション - モンゴル国の事例に見られる文化の様式 -

梶浦靖子(東京藝術大学)

(発表要旨)

オルティン・ドーはモンゴルの民謡の一ジャンルであるが、モンゴル国においてはその伝統の担い手たちの間に、楽曲の独特の分類法が見られる。それは曲の「大きい」「小さい」に関する分類法であるが、特徴的なのは、その分類結果が人によって異なること、つまりある人が「大」とみなす曲を別の人は「小」とみなすことである。さらに驚かされるのは、そうした見解の相違を是正するための議論のようなことが行われなければならないか、控えめに「自分の意見の方が正しいと思う」などとすら言及しない彼らの態度である。普通、我々が物事を分類するのは、分類される物事に関する見解を一つの集団内で統一させるためであり、そのためには同一の分類結果を共有することが大前提となる。モンゴル国における上記のような事例には、彼ら独特の価値観と文化の特質が反映されていると考えられる。

本論分ではそうした楽曲の分類法を、認識人類学という民俗分類 folk taxonomy の一種とみなし、その分類の基準を明らかにすることを試みた。そして、楽曲の分類法に関連しての上記のような彼らの態度と、十三世紀前後のモンゴル帝国の諸文化・諸民族に対する統治の手法とには、ある共通点

が見られる。本論分ではそれを R. ベネディクトのいう「文化の様式 (『文化の型』と呼ばれることが多い)」の現れとみなし、今回とりあげた事例から見出しうる、モンゴル文化の様式の一端を描き出すことを試みた。

2. 革命現代京劇《海港》の音楽的研究

長嶺亮子(沖縄県立芸術大学)

(発表要旨)

本発表は、中華人民共和国の文化大革命期(1966-76)に創作、公演された革命現代京劇《海港》の音楽分析を通して、伝統的な枠から変化したようにみえる革命現代京劇の音楽の持つ「京劇性」、すなわち京劇音楽として継承されるものとは何かについて考察する事を研究の目的とした。

文化大革命期には、それまで伝統的に行われてきた経済、政治、芸術等に対し、社会主義理念に基づくよう改革が加えられた。京劇においても、脚本中で政治思想を反映させたり、西洋音楽理論の導入等が行われた。しかし京劇中の台詞や衣装、音楽等の演劇要素は多くの規定のもとで構成されているのであり、その規定すべてが改革によって損なわれたのであれば、革命現代京劇が「京劇」という名称を用いることに矛盾が生じる。

本論の音楽分析の結果、革命現代京劇《海港》の音楽は、西皮腔等の伝統的な京劇音楽の様式を継承した側面と、西洋楽器や音楽理論を導入した側面、曲牌等の伝統的な音楽要素を排除した側面の三つが確認できた。しかし、新たな導入や伝統の排除が突発的に行われたのではなく、西皮腔等の伝統的な京劇の音楽様式を基盤としているのであり、新しい技法の導入や伝統的な技法の使用に変則が起きながらも、それらは伝統的な技法やその意味の継承に準拠している。したがって、革命現代京劇の音楽における「京劇性」とは、伝統的に行われてきた京劇音楽の様式の継承であると結論付けた。革命現代京劇に政治的な要素が含まれていることは否めないが、しかしこれは文化大革命時期に突発的に創作された形式ではなく、伝統的な中国劇と現代社会が融合し発展していく、京劇の一過程の姿であると捉えることもできよう。

3. 明治期ハワイ・オアフ島における日系移民と日本人芝居

- 日系新聞に掲載された関連記事を中心に -

前島 美保(東京藝術大学大学院)

(発表要旨)

1885(明治 18)年当初、日本からハワイへ出稼ぎ労働者として送り出されていた日系移民は、次第にハワイに定住し、日系人社会を築いていった。1910(明治 43)年にはハワイの総人口の約 4 割が日系移民で占められた。常に異国の音楽

や芸能に触れる機会があった彼らにとって、日本人芝居(歌舞伎・新演劇・浮れ節芝居)はどのような意味と機能を持っていたのか。

本論文では、従来の日系移民研究で十分に活用されてきたとは言いがたかった日系新聞(ハワイ大学ハミルトン図書館所蔵の『やまと』、『やまと新聞』、『日布時事』)を第一次史料として、ここから明治期の日本人芝居に関連した記事や広告などを抽出し、ハワイ・オアフ島における日本人芝居の成立と上演状況の実態を調査・報告した。

ホノルルを拠点とした歌舞伎の「旭座」、新演劇の旭團、浮れ節芝居の文明座は、1906(明治 39)年には俳優三座組合を結成して、オアフ島、ならびにハワイの他島を移動しつつ芝居を上演していた。各地の日系社会で芝居の要請があったためである。あわせてこの時期には、専用の劇場が都市部や各耕地で次々と建てられていった。1909(明治 42)年の日系移民がおこした大ストライキにおいては、新作の芝居を打つことにより日系移民同士をつなぐ社会的役割を果たした。このように明治期のハワイ・オアフ島における日本人芝居は、日系移民と故国日本をつなぐ媒体であったと同時に日系移民同士を団結させるための媒体でもあったこと、つまり芸能が娯楽として以上の役割を担っていたことが史料より確認された。

(コメント)

卒業論文は 2 本あった。まず、新居洋子氏による発表は、プロパガンダという言葉を経験的行為として捉え 1910 年代から 30 年代にかけて共産党との関わりで、人々が「主体性」をもってこれらの歌曲に接していたことを示した。増山賢治氏からは、プロパガンダとは誰が何のために行なおうとしたのかを整理する必要があることと国民党の扱いについて質問があり、資料の限界や政治的理由から困難な点が多く、また日本との関わりも課題であることが答えられた。次に、與那城常和子氏による発表は、グンデル・ワヤンの曲を事例にして、拍とリズムの問題を扱ったものであり、有拍、無拍、早い拍、遅い拍などの曲を分類し分析した結果が示された。塚田健一氏から、有拍や無拍が現地語でどのように言うのかという質問に対して、beat を感じるかというインタビューの仕方である、という答で、現地の概念と西洋音楽で捉えている概念との重ね合わせの問題があり、拍とリズムを整理する際の課題が示されたと言えよう。修士論文は 3 本あった。梶浦靖子氏による発表は、モンゴルのオルティン・ドーの楽曲を民俗分類法の観点でとらえ、そこにみられる文化の様式を文化人類学の概念上で明らかにしたものと捉えられる。植村幸生氏から、一人の歌い手が一つの曲を大小で歌い分けるか、

という問に対して、歌手の意識内ではそれはなく、長い年月を経ての個人様式の変化がある、という答があった。また塚田氏からは文化人類学の基盤でみた場合、近年の研究を踏まえた新たな視点が要求されるのではないかと、という指摘があった。次に、長嶺亮子氏による発表は、中華人民共和国の革命現代京劇『海港』について、その「京劇性」を音楽分析から示そうとしたものであろう。増山氏からは、伝統京劇の継承、排除、導入の三つの側面についてさらに細かい考察が必要であり、また、この革命現代京劇は伝統京劇に耳慣れたものからするとある種の破壊に聞えることもあり、伝統京劇とは異なるものと見なされる、というコメントがあった。伝統京劇との比較研究が今後の課題ともなるようである。修論発表の最後は、前島美保氏による発表で、明治期ハワイ・オアフ島における日系移民の音楽・芸能活動の実態に関する資料研究である。塚原康子氏からの、芝居を本土と意識的に変えようとした動きはなかったか、という問いに、独自性を打ち立てるよりも、本土に近くしようとした記事が多かった、という答があった。また、加藤富美子氏から、日本とのつながりをハワイに住むからこそ意識したという記事はあったか、という問いがあり、芝居を見て日本を思い出す一方で、芝居自体に変化がないため日本を感じなくなったという記事もあった、という答があった。

(永原恵三)

第 447 回東洋音楽学会定例研究会 (2002 年 5 月 11 日)
(第 70 回日本音楽学会関東支部・東洋音楽学会合同例会)
お茶の水女子大学共通講義棟 2 号館 102 室
シンポジウム「東アジアにおける近代音楽の諸相」

報告

「譚盾の音楽は東アジアの現代音楽？」

～如何に分析すべきか～

仲万美子 (同志社女子大学)

(報告要旨)

東アジアと西洋の音楽文化とが出会った最初期から徐々に相互理解が始まり文化の乗り入れが進行、双方に文化を運ぶ人間やメディアが情報を伝達して、文化交差が生じた。そして西洋のみで展開された東洋文化を導入した新文化の創造が、東洋でも始まり、西洋文化の要素と自国の伝統文化の要素を両有し、文化脈絡の変換を遂げながら定着の様相も見せ始めた。その段階では、西洋人にとって東アジアの音楽文化に内在する「文化の構図や尺度」が「暗黙的な知」の領域にあったが、徐々に汲み上げられ、「明示的な知」の領域に接近した。そして東洋人もアイデンティティを意識したことを契機に、自文化の水面下にある「暗黙的な知」にも目をむけた。

さらに、「ワールドミュージック」が登場し、西洋・東洋という文化の二元性でなく、一見、均質あるいは同一化された音楽文化社会が出現し、近代東アジアの文化空間が変貌をとげた。その 20 世紀末に、アメリカに居を移し、創作活動を活発に展開している中国人のクリエイター譚盾 (TAN , Dun , 1957 ~) 氏は何を創作し、だれに受容され、期待されたか、近代音楽史でどこに位置づけられるか。彼は中国湖南省の農村で育ち、文化大革命後再開した北京の中央音楽学院で 8 年間学び、1986 年に渡米、コロンビア大学に留学し、ニューヨークに居を構え音楽活動を行っている。本報告で New York Times (1986 ~ 2001 年) の記事を中心に検証した。

譚盾氏の創作世界は、ダンス、室内楽、オーケストラ、オペラ、映画音楽など年代を経るごとに多様な展開をみせ、代表作に位置づけられる作品に関する記事では、かれの創作活動史が語られている。彼はニューヨークという極めて多文化が混在する地域に本拠地を置き、ヨーロッパなど世界にむけて創作活動を行ってきた。このような創作活動を促す外的な要因がかれの創作分野の拡大を促進させた。また、かれの作品に共通して立ち現れる中国の民族音楽や楽器の取り扱い、エキゾチックな音素材として西洋人を魅了するだけではなく、文化大革命時代の「下放」経験を含め、伝統的なシャーマンの儀式音楽や芸能の世界に触れたことで、彼の身体に擦り込まれた音感覚が、自分自身の文化意識のルーツの表明として、自文化をストレートに表現したものと考えられる。

身体に日本音楽を内在させつつも、西洋音楽の音風景の中で生まれ現代音楽の創作活動を展開した日本人や、文化停滞期ともいえる文化大革命中に中国の大都会で過ごし、その後も伝統音楽と西洋音楽文化が共存する音環境の中で、中国に居住し、創作活動を続けている音楽家とは立場を異にしている。従って、譚盾氏の研究は、従来の音楽史学、音楽美学、民族音楽学そしてカルチュラル・スタディーズの領域からの複合的な分析が必須であり、同時に、20 世紀の東アジアの近代音楽の持つ本質をひもとくケーススタディとなる。

報告

「日本作曲界通史：現況と問題点」

榎崎洋子 (愛知県立芸術大学)

(報告要旨)

日本の作曲界を対象にした本格的な通史はまだ書かれていない現状をふまえ、これまでに書かれた日本の作曲界を対象にした通史的な記述をいくつか例に挙げて「年代区分」「作品評価の基準」「作品研究と通史」に関して記述の傾向と問題点を指摘し、今後書かれるべき日本の作曲界通史の手がかりとしたい。

執筆者の専門分野と視点によって、年代区分および作品評価の基準が変わってくるのが認められる。たとえば、小島美子「作曲界・明治百年」(『音楽芸術』第26巻第1号、1968年)では歌曲作曲の始まる1900年が芸術音楽の始まりとみなされているが、園部三郎『音楽五十年』(時事通信社、1950年)ではオーケストラ作品が書かれ始める1912年以降を扱った章で初めて「作曲界」の項目が出てくる。柴田南雄「五〇年代から六〇年代はじめの日本作曲界」(『音楽芸術』第31巻第7号、1973年)では武満徹、湯浅譲二、三善晃をはじめ戦後活動を始める作曲家たちの比較的初期に書かれた、欧米の前衛音楽の手法を取り入れた作品が挙げられているが、中島健蔵『証言・現代音楽の歩み』(講談社、1978年)ではそれらの作曲家たちのデビューから20年経った1970年代の作品がすぐれた作品として挙げられている。このように、声楽作品にオリジナリティを見出す記述がある一方で、声楽よりも器楽作品を評価する記述もあり、また、欧米の新しい動向をいち早く取り入れることを評価する記述がある一方で、自身の語法を熟せたと感じさせる作品を評価する記述もある。

ソナタ作品を書く技術に欠ける、という日本の作品に対する批評に対し、小宮多美江はその著書『近現代日本の音楽史』(音楽の世界社、2001年)の中で、構成力に欠けると映る特徴は、3度体系の音組織ではなく旋法的感覚をもつ日本の作曲家のオリジナルな構成法の萌芽であると反論する。このように作品評価は記述ごとにばらばらで、各作品は通史に居場所を得ていないことが認められる。作品評価の違いには、ヨーロッパの近代音楽を主なレパートリーとしていた演奏活動における作品イメージと、作曲活動における作品イメージとの齟齬も示唆されている。

日本の作品を対象にした作品研究の成果が必ずしも通史に反映されていないのは、作品研究に使われる音楽理論が歴史的コンテキストから切り離されたところにあるゆえと思われる。一方、個々の作品の歴史的な位置を想定しての作品研究は、その成果が通史的な見直しをも示唆すると考えられる。

報告

「日本から近代を考える」

徳丸吉彦(放送大学)

(報告要旨)

1. 「近代化」は英語の **modernization** に対応するが、この語はとくに第二次大戦後の日本では、特別の意味を与えられた。当時の言説に共通するものとして、以下の点があげられる。1) 個性尊重主義：戦時中の全体主義への反省。2) 民主政治：参政権、とくに婦人参政権の強調。3) 産業化：国民総生産の高さを近代化の指標とする態度。4) 都市化：流

通を前提にした都市を近代化の指標とする態度。5) 合理性を尊重と反宗教性：戦時中の国家神道への反省。

2. 近代化は本来、他の世界の情報を知ることと関係した。情報を得るためには、その時々インフラ・ストラクチャーが必要であるが、その整備の度合いは、国によって異なった。植民地化された地域では、宗主国の情報が圧倒的な強さで入ってきた。ベトナムにおける国字のローマ字化やビール・飲酒はフランスの影響である。ベトナムのリセで『蛍の光』がフランス語で歌われたことは、こうした状況を示すもの過ぎない。

3. 近代化は、自文化をより広い座標の中に置く態度に関連する。植民地化されなくても、文化の領域で、こうした態度が起こる。日本における西洋服飾の使用がその例である。哲学のケーベルは日本人の西洋服を「西洋文明の曳き綱に曳かれたる日本」として軽蔑しながら、日本人に西洋音楽と西洋哲学を教えることに疑問をもたなかった。領域による違いの例である。

4. 明治以降の邦楽界は、近代化の影響を受けてきた。自分の音楽文化を離れてみる態度の結果である。最初は音楽様式の上では影響を受けず、むしろ教授過程の制度化、とくに、楽譜を使用する制度の強化として、その影響が現れた。記譜法と口頭伝承は日本の音楽では共存していたが、この影響で、その比重が前者に傾くことになった。さらに、西洋文化の影響をうけた新しい記譜法が次々に生まれ、実用化された。長唄・地歌・箏曲の現行の楽譜を仔細に見れば、五線譜だけでなく、アラビア数字の利用などの点で、西洋文化の影響が明らかである。

5. 他文化を意識する傾向は、楽譜の開発と使用から、さらに新しい音楽の創造に向かった。西洋音楽に接する機会が増えたのは、学校制度の強化、印刷の普及、音楽産業の発展、マス・メディアの成長による。結果として、日本では、他文化からの刺激が自文化の活動を活性化するとともに、こうした制度に乗りにくい音楽を結果として抑圧することになった。

6. これからの課題は二つある。第一は、諸外国が日本文化を他文化として意識して学ぶ意欲を示していることに、日本が積極的に対応することである。簡単に言えば、日本の音楽関係者は日本音楽を海外で普及させることに努力してこなかった。第二は、日本での他文化の座標を拡大することである。他文化の音楽は西洋の都市の音楽だけをさすのではない。地球上の人々がどのような音楽をもっているのか、民族や地域の大小にこだわらずに、意識する態度が必要であろう。外国における日本音楽にも、日本における韓国音楽にも、もっと関心をもつような態度が必要である。その時、他文化を含む大きな座標の中に自文化を置くことになろう。

(コメント)

5 月 11 日の合同例会では、司会の永原氏からの趣旨説明につづき、異なる視点・対象・方法で日本を含む東アジアの近代音楽の研究と取り組んできた 3 人のパネリストの報告があり、休憩後それに基づく全体討論が行われた。譚盾を事例にした音楽知の東西往還(仲氏)、日本の創作界通史(檜崎氏)、東アジア音楽文化の近代化の検証(徳丸氏)を話題にした各パネリストの報告に対し、シンポジウムのタイトルから予想される論点が来聴者間でも相当に拡散していたせいか、討論の初めには近代化と西洋化の問題をめぐって議論が噛み合わない場面が見られた。東アジア域内での近代化のレベル差・地域差・時差とそれらに対する評価の視点をめぐる議論に移って、ようやくパネリスト報告相互の関連性が見え始め、討論の最後には地域差や自文化内部の非連続性・非一様性よりも近代化を指標とする連続性が意識化されがちであった日本の特性が看取されたように思えた。(塚原康子)

第 448 回東洋音楽学会定例研究会 (2002 年 6 月 1 日)

東京藝術大学音楽学部 5-301 教室

研究発表

1. 薩摩琵琶歌の歴史的研究のために - 史料紹介と考察 -

島津正(薩摩琵琶演奏家)

(発表要旨)

日本古来の歌謡の研究は進んでいるが、薩摩琵琶歌については殆ど研究がなされていなかった。これは薩摩琵琶歌には江戸期の墨書資料がなかったためである。しかし私は明治になって出版された琵琶歌本の中に江戸以前の薩摩琵琶歌(古薩摩琵琶歌)があることを知り、これを網羅すれば古薩摩琵琶歌の研究も可能であることに気付き、本会誌 58 号(平成 5 年 8 月)に発表した。また同年 11 月鹿児島県立図書館で波多江種一の「散佚薩摩琵琶古曲十二篇」を発見し、その中にある浄瑠璃風の歌 5 曲を加え、63 曲の歌詞が得られた。これを当時の分類法で「崩」「長歌」「端歌」に大別し、「端歌」はその内容により細別したのが「資料」(*)の『古薩摩琵琶歌の全容』で各種別毎に代表的な歌詞も掲げている。作者については『古薩摩琵琶の作者一覧』で示したが高橋以外は伝承による。

なお古薩摩琵琶歌は後人により改作することが許されていた。また「浮き世は尽きせんもの哉」という詞章を歌の最後に必ず歌うことが長年行われていたが、これはこの歌謡の特異性であろう。明治に入り薩摩琵琶が流行りだすと新曲を調達する必要が起こり、始めは既存の歌の中から琵琶歌を探していて平野国臣の「月照」、久坂玄瑞の「七脚落」は今も歌われている。そのうち高崎正風、田中頼庸、吉水経和、小田錦

蛙等が琵琶歌作りを始めているが、その他に多くの人が琵琶歌を作り始め、琵琶歌と称するものは莫大な数に達する。私はこの内から弾奏家が携わっている本にあり、しかも 2 冊以上の本に掲載されている曲を明治新曲とし、これを当時の分類法により段物と端歌に分かち整理したのが「資料」の「明治新曲」の総括で私は 88 曲(段物 14、端歌 74)を明治新曲とし、その代表的な歌詞も掲げている。また「資料」に「琵琶歌作者の略歴」を掲げておいた。高崎正風は明治 14 年秋に「小督」を作り、また彼の下阪正臣、落合直文等の若人が集まり琵琶歌の研究をしているが、琵琶歌は非定形の叙事詩であるから、落合の新体詩の淵源は琵琶歌ではなかったか。とすれば高崎の「小督」は日本の近代文学の先駆ではなかったか。文学のことを知らない私の妄想である。

注

(*)「資料」とは島津氏が発表当日に配布した資料「明治以前薩摩琵琶歌」を指す。(注は例会参事滝沢友子記す)

2. 桃山期の謡の旋律

- 下間少進手沢鳥養道晰節付本を中心に -
高桑いづみ(独立行政法人東京文化財研究所)

(発表要旨)

謡の旋律は、時代とともに大きく変化した。天正十一年に編まれた『塵芥抄』には「呉服」の上歌について詞章の横に五声を付けた譜を載せているが、五声をたどっていくと、現行とは異なる謡の旋律がうかびあがってくる。現在、「呉服」の謡はツヨ吟で謡うので音高変化が少ないが、当時はヨウ吟のようにメロディックな謡い方をしていたらしい。だが上歌しか記載がないので、この旋律を他の謡に汎用することはできなかった。

ところで、法政大学音楽研究所蔵の『下間少進手沢鳥養道晰節付本』にも、部分的だが詞章の横に上・中・下といった直シ(補助記号)や五声が付けられている。鳥養道晰は桃山期から江戸初期にかけて活躍した書家で、金春大夫喜勝から謡を伝授され、車屋本と通称される謡本を多く製作した人物である。直シは道晰自身が付した可能性が高いので、『塵芥抄』とほぼ同時期の資料ということになる。五声を解説することで、『塵芥抄』では判明できない部分の旋律をある程度推測することが可能になった。

以下、判明した点をまとめておく。

1 現在の観世流の謡では、上音から中音へ下がるときいったん上ウキ音へ上昇してから中音へ下げているが、『塵芥抄』や手沢本では、中ウキ音に下がってから中音へ、音を変化させていた。上ウキ音から中音へは五度跳躍することになるが、

桃山時代にはこの動きはなく、四度の範囲で二段階に音高を変化させていたのである。

2 現在、ツヨ吟音階では中音から下音に下がるとき下ノ中音を経過するが、桃山時代にはヨワ吟でもこの動きがあった。

3 現在では音高を変えずに謡う箇所でも、桃山時代には細かく音高を変化させていた。とくに拍子不合のサシの部分にそれが顕著に見られた。

このようにたどっていくと、現在よりも旋律の動きが多く、歌謡性の高い旋律が浮かび上がってくる。謡は文字通り、「歌」だったのである。

(コメント)

島津氏は、薩摩琵琶に関する著書をすでに4冊出し、薩摩琵琶の歴史についてのそれまでの通説のいくつかを誤りとする、重要な指摘をされた方である。今回、福岡県からわざわざ上京されての発表だった。たぶん卒寿を迎えておられるのではないかと思うが、終始立ったまま、配布されたレジメを見ることなく、それでいてそのレジメどおりの順を追って発表された。

発表はご自身の研究歴を軸としつつ、口承を旨とすべしという薩摩藩の政策のために史料の少なかったこの分野で、いくつかの史料を見いだした経緯やその内容などを紹介された。そして改作、改変の多い事実を指摘したうえで、「古薩摩琵琶歌」と「明治新曲」の曲目を整理分類した表を提示された。島津氏からの申し込みによって実現した発表だと想像するが、全体として、研究発表というより講演としたほうがふさわしい内容だと感じた。

このところ意欲的な発表を続けている高桑氏が、また興味深い成果をあげられた。桃山期の謡の旋律の動きを具体的に示す史料としては、つとに「塵芥抄」が知られていたが、今回、下間少進手沢鳥養道断節付本に見られる多数の五音(五声)の記入を手がかりに、さらに詳しく明らかにし、当時の謡の復元につなげようというものである。解読、分析の手順は、いつもながらの高桑氏らしい綿密さであった。まとめとして、塵芥抄で確認されていたことはヨワ吟にも対応すること、ヨワ吟には現行よりもっと細かい上下があったこと、サシではゴマにしたがって上下したこと、などが述べられた。

では具体的にどううたっていたのかということになるが、11月に横浜能楽堂で行われる「秀吉の見た能」という催しで、この発表の成果が披露されるよしである。そこに足を運べば、テンポなどの面での復元を含めて、桃山期の謡を聞くことができるであろう。

(蒲生郷昭)

会員異動

名簿記載事項の訂正・変更・追加

(2002年5月~7月、訂正箇所は下線部)

正会員

住所・所属等に変更ありましたら事務局までご連絡ください。(機関誌別冊会員名簿とじ込みの変更届用はがき、またはファクス、E-mail 等でも結構です)

改姓・改名のお届けには、ご希望の表記法をお書き添えください。(複数表記される場合、どちらを主な表記にするのか等)

事務局に登録はされても、公表を希望されない情報等がある場合には、その旨明記してください。

図書・資料等の受贈

(2002年5月~7月、到着順)

- 『宮城道雄記念館館報』No.27 宮城道雄記念館
『長唄ひいき』 池田弘一著 青蛙房
『長唄「橋弁慶」考察』(神田外語大学紀要抜刷)
池田弘一著
『長唄閑話』 稀音家義丸著・発行
『浜松市楽器博物館だより』No.27 浜松市楽器博物館
『楽道』5,6,7月号 正派邦楽会
『白い国の詩』5,6,7月号 東北電力(株)地域交流部
『月刊みんぱく』5,6,7月号 国立民族学博物館
『地域研究論集』Vol.4 No.1
国立民族学博物館地域研究企画交流センター
『日本音楽学会会報』第55号
『音楽学』第47巻3号
『日本音楽学会関東支部通信』第58号 日本音楽学会
『民俗芸能研究』第34号 民俗芸能学会
『宮古路節の研究』 根岸正海著 南窓社
『日本の太鼓、アジアの太鼓』 山本宏子著 青弓社
『年報 音楽研究』第18巻
大阪音楽大学音楽研究所・楽器博物館
『BULLETIN』No.6 Vietnamese Institute for Musicology

新刊書籍

- 『青空の音を聞いた 団伊玖磨自伝』団伊玖磨著、日本経済新聞社、¥2,500
- 『アコーディオンと鉢巻 教壇から大衆運動へ、いつも歌があった』田場盛徳著、ゆい出版、¥2,200
- 『イスラームの祭り』G.E.v. グルーネバウム著、法政大学出版局、¥2,300
- 『市川団十郎代々』服部幸雄著、講談社、¥4,200
- 『インド民俗芸能誌』小西正捷著、法政大学出版局、¥3,200
- 『唄に聴く沖縄』松村洋、白水社、¥1,900
- 『裏千家学園公開講座 PEL シリーズ 能と茶の湯』種田道一著、淡交社、¥1,238
- 『江戸時代武家行事儀礼図譜 5』諸大名江戸城御殿席図 深井雅海編、東洋書林、¥28,000
- 『奥多摩の民衆芸能と山』渡辺唯夫著、文芸社、¥1,300
- 『音のふしぎ百科』茂下和雄著、樹立社、¥3,800
- 『踊りの宇宙 日本の民族芸能』三隅治雄著、吉川弘文館、¥1,700
- 『お笑い超大国中国の真実』鷹木敦著、講談社、¥1,600
- 『音楽科と他教科とのかかわり』、音楽之友社、¥2,000
- 『音楽・芸能賞事典』日外アソシエーツ株式会社編集、日外アソシエーツ / 紀伊国屋書店、¥16,000
- 『音楽年鑑 2002』、音楽之友社、¥12,000
- 『音楽療法の意味 心のかけ橋としての音楽』メルセデス・バヴリチェヴィック著、本の森、¥2,800
- 『音楽療法研究と論文のまとめ方』資格取得をめざす人のために、貫行子共著、音楽之友社、¥1,800
- 『雅楽壺具』林陽一写真、東京書籍、¥12,000
- 『桂米朝 私の履歴書』桂米朝著、日本経済新聞社、¥1,429
- 『桂米朝口噺の世界』宮崎金次郎写真、向陽書房、¥3,800
- 『かぶき発生史論集』郡司正勝、鳥越文蔵編、岩波現代文庫、¥1,000
- 『歌舞伎浄瑠璃稀本集成』(2冊組) 演劇研究会編、八木書店、¥38,000
- 『歌舞伎人名事典』野島寿三郎編、日外アソシエーツ / 紀伊国屋書店、¥16,000
- 『観光文化の振興と地域社会』井口貢編著、ミネルヴァ書房、¥3,000
- 『祇園信仰事典』真弓常忠編、戎光祥出版、¥15,000
- 『教育と芸術/新たな関係』海外の事例に学ぶ、芸団協出版部 / 丸善(株)出版事業部、¥1,000
- 『教科書から消えた唱歌・童謡』横田憲一郎著、産経新聞ニュースサービス / 扶桑社、¥1,238
- 『狂言変遷考』永井猛著、三弥井書店、¥9,800
- 『京都の夏祭りと民俗信仰』八木透編著、昭和堂、¥2,300
- 『金砂大祭礼の歴史』志田諄一著、茨城新聞社、¥1,800
- 『(日本史リブレット 54) 近代歌謡の軌跡』倉田喜弘著、山川出版社、¥800
- 『グリオの唄』竹内海南江著、ブルース・インターアクションズ、¥1,700
- 『悔過会と芸能』佐藤道子著、法蔵館、¥14,000
- 『声の力 歌・語り・子ども』河合隼雄ほか著、岩波書店、¥1,600
- 『知ってるようで知らない民族音楽おもしろ雑学事典』星川京児著、ヤマハミュージックメディア、¥1,600
- 『実用音楽事典』岩田晏実ほか著、ドレミ楽譜出版社、¥2,200
- 『島唄 オキナワ・ラブソディ 登川誠仁伝』森田純一著、荒地出版社、¥1,700
- 『尺八の歴史』(改定版) 上野野實著、出版芸術社、¥3,800
- 『三味線十二ヶ月 黒御簾談話』杵屋佐之忠、演劇出版社、¥3,000
- 『生涯学習のための和楽器の奏法と活用』茅原芳男著、邦楽教育振興会、¥1,429
- 『庶民信仰と伝承芸能 東北にみる民俗文化』菊地和博著、岩田書院、¥6,900
- 『世界の民族音楽ディスク・ガイド』星川京児編、音楽之友社、¥2,400
- 『全国一宮祭礼記』落合偉洲ほか編、おうふう、¥4,800
- 『千住博大徳寺聚光院別院襖絵大全 1』千住博著、求竜堂、¥1,250
- 『千住博大徳寺聚光院別院襖絵大全 2』千住博著、求竜堂、¥1,250
- 『地中海の暦と祭り』地中海学会編、刀水書房、¥2,500
- 『中国広西壮族歌垣調査記録』手塚恵子著、大修館書店、¥4,500
- 『つく舞考』古谷津順郎著、岩田書院、¥2,800
- 『手にとるように民俗学がわかる本 日本の不思議を楽しもう!』岸祐二著、かんき出版、¥1,400
- 『東京漫才うらばな史』遠藤佳三著、青蛙房、¥2,600
- 『富山民俗の位相』民家・料理・獅子舞・民具・年中行事・五箇山・その他 佐伯安一著、桂書房、¥10,000
- 『長唄閑話』稀音家義丸著、新潮社、¥3,900
- 『長唄びいき』池田弘一著、青蛙房、¥3,900
- 『夏だ!祭りだ!踊りに行こう』三隅治雄出演、日本放送出版協会、¥1,000
- 『日中文化論集』多様な角度からのアプローチ、神奈川大学人文学研究所編、勁草書房、¥4,200

- 『日本文化を知る講座』第 2 集 国学院大学日本文化研究所
編、国学院大学日本文化研究所、¥3,000
- 『ニライカナイ神の住む楽園・沖縄』三好和義著、小学館、
¥2,500
- 『人形浄瑠璃の歴史』廣瀬久也、戎光祥出版、¥1,800
- 『能と茶の湯』種田道一著、淡交社、¥1,238
- 『弾き物のさだめ 翻刻と校訂』蒲生郷昭ほか編、邦楽社、
¥1,800
- 『評論・随想集 能楽展望』堀上謙著、たちばな出版、¥3,200
- 『舞台芸術と法律ハンドブック』公演実務 Q&A、文化法研究
会編著、芸団協出版部 / 丸善 (株) 出版事業部、¥2,300
- 『ブラジリアン・ミュージック』Selected 500 over titles of
compact discs、麻生雅人監修、シンコー・ミュージック、
¥1,800
- 『フラメンコへの招待』小島章司編、新書館、¥1,600
- 『フロストの仮面劇』ロバート・フロスト著、近代文芸社、
¥1,600
- 『文化人類学の本全情報』日外アソシエーツ株式会社編集、
日外アソシエーツ / 紀伊国屋書店、¥28,000
- 『宮良長包』三木健著、那覇ニライ社発行、東京・新日本教
育図書発売、¥2,000
- 『民族楽器を楽しもう 楽器教室徹底ガイド』若林忠宏著、
ヤマハミュージックメディア、¥1,700
- 『夢幻能の方法と系譜』飯塚恵理人著、雄山閣、¥16,800
- 『ヤマトタケルノミコト 即興謡曲』深見東州著、たちばな
出版、¥1,300
- 『よくわかる音楽著作権ビジネス 基礎編、実践編』安藤和
宏著、リトミュージック、¥2,900
- 『四代越路大夫の表現 文楽鑑賞の手引き』竹本越路大夫 (4
代目) 述、淡交社、¥2,500
- 『落語大百科 4』川戸貞吉著、冬青社、¥2,500
- 『落語の言語学』野村雅昭著、平凡社ライブラリー、¥1,300
- 『冷泉家時雨亭叢書 第 30 巻 中世私家集』冷泉家時雨亭文
庫編、朝日新聞社、¥30,000
- 『笑いの芸能にわか〜発掘! ぎふの庶民文化〜』神田卓朗著、
岐阜新聞社、¥2,286
- 『わらべうたによる音楽教育』遊びと合唱・幼児から小学生
へ、本間雅夫共著、自由現代社、¥1,500
- 『わらべうたが子どもを救う』教育の原点は「言葉みがき」、
大島清著、健康ジャーナル社、¥1,600

新発売視聴覚資料

コンパクト・ディスク

- 『義太夫選集 / 竹本越路大夫』ビクター伝統文化振興財団
VZCG-8139~8149 (11 枚組) ¥34,650
- 『決定版 沖縄の民謡 島唄』日本コロムビア COCJ-31892~3、
¥3,675
- 『決定版 東北の民謡』日本コロムビア COCJ-31890~1、
¥3,675
- 『決定版 日本の民謡』日本コロムビア COCJ-31888~9、
¥3,675
- 『高野山の声明 大曼荼羅供』ビクター伝統文化振興財団
VZCG-249、¥3,150 円
- 『箏曲地歌大系』(60 枚組)(再発売)監修・解説 平野健次、
ビクター伝統文化振興財団、VZCG-8150~8209、¥189,000
- 『トランス・パリ』日本ビクター株式会社 VICG-60528、
¥2,000
- 『端唄で遊ぶ』稲邑粹有英、邦楽の友 cd048、¥3150
- 『民謡の祭典』日本コロムビア COTF-5058 ¥2,940
- 『明烏夢泡雪(新内)』ビクター伝統文化振興財団、VZCG-281、
¥3,150
- 『メディテーション・インド』日本ビクター株式会社
VICG-60527、¥2,000
- 『龍笛の唱歌と演奏 壱越調』(二枚組)芝祐靖(唱歌・演奏)
バンブーBCD-038、¥5,000
- 『龍笛の唱歌と演奏 平調』(二枚組)芝祐靖(唱歌・演奏)
バンブーBCD-039、¥5,000
- 『ビクター落語』(第 2 期 15 タイトル)ビクター伝統文化振
興財団、VZCG-284~298、¥1,575
- 『ビクター落語(上方篇)』(第 1 期 30 タイトル)ビクター伝
統文化振興財団、VZCG-251~280 ¥1,575
- 『HAWAIIAN SUITE / OHTA-SAN (HERB OHTA)』(ハワイアン・ス
イート)日本ビクター株式会社 VICG-60494、¥2,600
- 『JVC WORLD SOUNDS Best Selection CHINA』(中国の伝統音
楽入門 CD)日本ビクター株式会社 VICG-60523、¥1,500
- 『JVC WORLD SOUNDS Best Selection JAPAN』(日本の伝統音
楽入門 CD)日本ビクター株式会社 VICG-60521、¥1,500
- 『JVC WORLD SOUNDS Best Selection KOREA』(韓国の伝統音
楽入門 CD)日本ビクター株式会社 VICG-60522、¥1,500

VHS ビデオ

- 『アニメ能物語 第 1・2 巻』デントーアート、¥15,000
- 『能紙芝居 100 話』デントーアート、¥15,000

前号の訂正とお詫び

前号 1 ページの上部に掲載した学会ホームページのアドレスの一部が欠けておりました。正しいアドレスは下記の通りです。心より、お詫び申し上げます。

<http://www.soc.nii.ac.jp/tog/>

編集後記

今期の会報編集委員会は、今号をもってその任を降ります。各号とも充実した内容となりましたこと、原稿をお寄せいただきました会員諸氏にお礼を申し上げます。なお、会報編集作業の実務はすべて参事委員の献身的な尽力によって行われたものです。ここに改めて感謝の意を表させていただきます。

次号からは学会の制度改革にともない、各支部の支部通信と会報のそれぞれが発行されることになり、会報の装いも新たになります。どうぞご期待ください。

会報編集委員会

理事：加藤富美子、野川美穂子

参事：太田暁子、小塩さとみ、小野美紀子、北岡朱実、斉藤完、高瀬澄子、竹内有一、鳥谷部輝彦、丹羽幸江、福田千絵、前島美保、前原恵美、増野亜子、松村智郁子、三上康子